



133号

2008/5/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



開校式の集会に参加の少女 2004年11月 ネパール ルンビニ 加藤誠一(ネパール・ミカの会)

‘わんりい’133号の主な目次

| | |
|----------------------------|-------|
| 北京雑感その(24)「中関村交差点」 | 2 |
| 私の調べた四字熟語(22)「千変万化」 | 3 |
| すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮(2) | 4 |
| 媛媛讲故事(3)「女娲补天」 | 6 |
| 四姑娘山写真だより(10)「ガルワン海子の思い出」 | 7 |
| 私の四川省一人旅(16) 亜丁Ⅲ | 8 |
| スリランカ紹介(18)「スリランカの小人・寄付金編」 | 10 |
| 中国を読む(51)「中国行きのスロー・ボート」 | 11 |
| 大連だより・日本語教師雑記(6) | 12 |
| アフリカとの出会い(25) | 14 |
| ‘わんりい’掲示板 | 15・16 |

【5月の定例会&おたより発送予定日】

- 定例会：5月19日(月) 13:30～ 田井宅
- おたより発送日：5月28日(水) 田井宅

♪「中国語で歌おう!会」・5月の歌 ♪

ホイニヤンジャア

「回娘家」(中国河北省民謡)

* 4月に引き続き練習します。お化粧も念入りにし、お土産を両手に意気揚々と里帰りするお嫁さんにとんでもない災難が……。明るいメロデーでお嫁さんの慌てぶりをちょっと可笑しく楽しく歌いましょう。(歌詞は16ページに記載しました)

▶ 於：まちだ中央公民館 7F・第一音楽室 ◀

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109 ファッションビル 7F

5月23日(金) 19:00～20:30

指導：趙鳳英 (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

●「中国で歌おう!会」 於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)

19:00～20:30 会費(月1回):1,500円 体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。

私が北京に滞在するようになったのは2000年からですが、その少し前頃から、中国の急速な経済発展が始まったようで、北京市内の、私が見聞するごく限られた地域でさえも急速な変化が現れました。

私の生活の拠点は、清華大学と紫竹院でしたから、中関村大街を南北によくバスで往復しました。初めの頃は、自家用車も今ほど多くはなかったのですが、中関村交差点の辺りはいつも渋滞していました。ある時、停まっているバスの窓から外を見て、交差している道が随分深く掘り下げられているのを発見しました。

聞いてみると、それが四環状線になる道でした。中国の工事現場は不思議なことに、何時通っても、建設重機がバリバリ動いているとか、人海戦術で作業をしていると言った場面に出会ったことがありませんでした。尤も、私は毎日見ている訳でもないし、現場に近寄って見た訳でもないの、定かには言えませんが、少なくともバスの車窓から見る限り、「せっせと作業をしている」と言うよりは、「工事が中断している」と言う印象でした。

ところがある日、北上するバスに乗っていると、交差点で直進するところを右、即ち東へ曲がりました。大分走ってから、工事をしていた道路を横切って、西に向かって走り、中関村大街に戻りました。つまり交差点での工事のため迂回した訳です。南下する時は、西へ曲がり、同じように迂回します。四環状線の工事が交差点に差し掛かったのです。しかし、バスから見える周りの様子は以前と余り変わりません。

日本の場合は、工事現場は囲いがしてあって見えない時でも、ダンプがしきりに出入りして、出入口では誘導員が交通整理をしたり、道に落ちた土砂を掃除したりして、作業が進行中ということが良く分かります。しかし北京では、少なくともこの道路工事では、そんな雰囲気は全く感じられませんでした。この違いはどこから来るのだろうと考えているうちに、一つ思い当たりました。

かなり前から、北京市への大型車両の乗り入れは制限されています。大型の運搬車両・工事車両等は、時間を限って、夜から明け方迄しか市内の走行を許されません。そのせいで、土木工事や基礎建築工事は夜分に実施しているのでしょう。確かに、北京市内では、日中走っているダンプカーを殆ど見ません。きっと、ダンプが出入りするような工事は夜間に集中して行っているのでしょう。

中関村大街のバスルートは、4ヶ月程で元に戻り、直進出来るようになりました。つまり、四環状線との交差

部分が完成したのです。それから1ヶ月で、私は日本に帰って来ました。

半年後に再び北京へ行くと、中関村大街付近の工事は終わっていました。交差点では、東西の道、つまり新しい四環状線が中関村大街の下を通して、車がビュンビュン走っていました。交差点で交差する車がなくなったので、交通渋滞も無くなったかと思ったら、案に相違して相変わらずの渋滞です。道路の整備が、車の増加に追いついていないのです。しかも、ここは以前から、信号機の設定が悪くて、人も車もうまく渡れませんでした。車の交差が無くなった現在でも、人間と車が入り乱れて渋滞を引き起こしています。

中国では歩行者優先の意識が無いのに、右折車は、前方の信号が赤でも右折できます。因みに、中国は車は右側通行ですから、日本の左折の場合と同じと考えてください。車の前方信号が赤と言うことは、横断歩道の信号は青。歩行者に渡る権利があるはずですが、車は歩行者を蹴散らすように突っ込んできて右折して行きます。

日本のように横断歩道の歩行者を待ってはくれません。青でも渡れない時が間々あります。それで歩行者は前方信号が赤でも、車が途切れれば渡ります。私は、初めてこのような歩行者を見た時、何とお行儀の悪い歩行者だろうと思いましたが、自分も歩行者の一人として歩いてみて、歩行者のこのような態度は、ドライバーの優越感と信号機の不備が原因で起こる、当然の帰結だと分かりました。

現在、市中心部の交差点は、青の矢印を採用して、車の「前方が赤の時は停車、矢印が出たら右折可」が大分浸透してきました。しかし、中心から離れた、ここ中関村交差点の辺りは、従来の信号機で、しかも、中心部に比べて、人も車も極めて多いので、慢性的な渋滞が発生します。おまけに、新しい地下鉄の工事で、この交差点の少し南、海淀黄庄の道幅が狭くなっていて(それでも3車線は確保されているのですが)、渋滞は今まで以上でした。

今年は、この辺りの信号機も市中心部と同様に改善されて、渋滞が解消されているのでしょうか。地下鉄工事が完成すれば、道路も元に戻り、中関村交差点の渋滞は昔話になっているかも知れません。でも、本当のことを言うと、運転者全体に対する歩行者優先の意識改革と、バス・タクシー等職業運転者に対するマナー教育が徹底されないと、北京の渋滞解消は無いと、私は密かに思っています。

インターネット業界に関するある調査の結果、次のような興味深い報告がされていました。『インターネット関連業界勤務の200人に「あなたが働く業界の2008年の展望を四字熟語で表すと何か」と質問したところ、1位の答えは「千変万化」と「日進月歩」(ともに24.5%)だった。一方、非インターネット関連業界勤務の200人の答えは「暗中模索」が最も多かった(28%)。』

「千変万化」は日常的に大変良く使われる熟語だと思います。辞書では、どう説明されているのでしょうか。

三省堂：現代国語は、「千変万化 さまざまに変わること。」

小学館：中日辞典では、「qiān biàn wàn huà千変万化 めまぐるしく変化する。」

と、説明されています。

この成語の由来はれつし〈列子(脚注)・とうもん湯問〉の「千変万化、惟意所适」(千変万化、唯意のむくま)の部分です。

周の国の穆王が西の地方を巡視している時に、途中でえんし偃師という名の、何でもこなすという達人に遭いました。穆王は彼に問いました。「聞くところによれば、お前は何でも出来るそうだが、いったいどんな能力があるのだ？」偃師は答えて言いました。「王様が私に造らせたいものを造ることが出来ます。今ちょうどある物が出来上がったところです。王様、先ずはそれをご覧いただきたいと思います。」穆王は偃師にそれを持って来るように命じました。

二日目に偃師は一人の人物を連れて王様にお目見えしました。穆王は「お前と一緒にきたのは何者だ？」と尋ねると、彼は答えていました。「これは私が造った、歌と舞の大変上手な人形です。」穆王はそれを見て非常に不思議に思いました。どう見ても人形には見えないのです。そしてすぐに人形に演技をさせるよう偃師に命じました。偃師は人形のお顔を動かしました。すると人形が歌いだしました。偃師は今度は腕を動かしました。すると人形は歌に合わせて軽快に飛び跳ねて踊りはじめました。

人形の動きは千変万化で、様々の仕草も思いのままでした。人形の演技はそれはすばらしいものでした。

穆王はその様を自分の寵愛する女性たちと一緒に見ていましたが、その人形は踊りの最後に、穆王の左右にはべっている女性に色目を送りました。穆王は怒

り、偃師を殺そうとしました。偃師はふるえあがり、すぐにその人形を分解して穆王に見せました。

分解して見ると、人形の身体の中には、皮やにかわや漆をかためて、白黒、赤青などの色をつけて造られた、肝臓、胆嚢、心臓、肺、腎臓、胃、腸等の器官があり、外側は筋肉、骨、皮膚、頭髮、歯までも何もかもそろっていました。

偃師が人形のそれらの部品を組み立てなおすと又自由自在に活動する「人」に戻りました。穆王は試しに偃師に人形の心臓を取り外すよう命じました。すると人形はしゃべることが出来なくなりました。肝臓を取り外すと人形は物を見ることが出来なくなりました。腎臓を取り外すと人形は道を歩くことが出来なくなりました。

この様子を見て、穆王は非常に驚き感心して言いました。「人間は何と器用なことよ、まるで神の万物の創造の様ではないか。」

千変万化はここから広く伝わり、変化の多い事物を形容することばとなりました。

ところで、「心臓を取り外すと口がきけなくなり、肝臓を外せば目が見えなくなり、腎臓を外せば歩けなくなった。」という部分は、それぞれの臓器と機能の対応について疑問に思われるかもしれませんが、これは五行(脚注)の考え方がもとになっています。ここで敢えて、五行思想を持ち出してきているのは、道家の書である『列子』の性格のためだと言われています。

〈注記〉

列子：『列子』は、春秋戦国時代の人、列御寇の尊称(「子」は「先生」というほどの意)だが、一般的には、列御寇の著書とされる道家の文献を指す。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

五行：「五行」は、中国医学の考え方からきています。

「五」とは木・火・土・金・水を言い、「行」とは運動・変化を言い表します。つまり、全ての事象は「木・火・土・金・水」の運動と変化によって構成されているというのが五行の考え方です。「五」と運動・変化の対応の参考例(対応については種々の説がある。)を下表に示します。

| | 五行 | 木 | 火 | 土 | 金 | 水 |
|----|----|----|----|--------|----|----|
| 人体 | 五臓 | 肝臓 | 心臓 | 脾臓 | 肺 | 腎臓 |
| | 五腑 | 胆 | 小腸 | 胃 | 大腸 | 膀胱 |
| | 五官 | 目 | 舌 | 口 | 鼻 | 耳 |
| | 五体 | 筋 | 脈 | 肉 | 皮毛 | 骨 |
| 自然 | 五季 | 春 | 夏 | 長夏(土用) | 秋 | 冬 |
| | 五色 | 青 | 赤 | 黄 | 白 | 黒 |
| | 五方 | 東 | 南 | 中 | 西 | 北 |
| | 五化 | 生 | 長 | 化 | 収 | 蔵 |

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 李晴 訳

第2回 日本人の友人たちが高鳳蓮おばあさんを訪ねる

私は日本に滞在した2年の間に5回の個展を開きました。陝北の色彩や造形を使用した作品は、日本の人々に好評で、展覧会をきっかけに中国の民間芸術に興味を持つ人たちとも出会い、友達となりました。

友人たちは私の作品を通して陝北の、風景や素朴な剪纸に興味を持つようになり、やがて、実際に陝北に広がる黄土高原へ行き、剪纸の作者に会ったり、そこに住む人々の暮らしを見てみたい、と言うようになりました。

延川県は黄土高原の中ほどにあり、今でこそ政治・文化の中心からは遠く離れていますが、かつては様々な民族による多種多様な民間の風俗・文化の揺籃の地だったのです。

1997年の旧暦正月、まだ外国人に開放されていなかった延川県は、初めて外国からの観光客を迎えました。黄土高原と陝北の民族芸術に関心を持つ日本人9人が、高鳳蓮さんの住む白家塬山に私の案内で訪ねたのです。

当時、閉そく状態の小さな村にいきなり沢山の日本人が訪れ、しかも同じ時に、北京のテレビ局も高鳳蓮さんと剪纸芸術をテーマにドキュメンタリー番組を作るためにやってきました。村の人々は大いに驚き、高鳳蓮さんの株が俄然上がりました。高鳳蓮さんの家は人の声で湧き立ち、窯洞の3つの部屋、庭の中、窯洞の屋根の上まで村の見物人で一杯になりました。

ちょうどその少し前に、北京で「世界婦女代表会議」が開催され、高鳳蓮さんの作品が会場を飾り、外国からの参加者や民間芸術の専門家から高い評価をうけたところです。私が《陝北四婆姨剪纸》を編纂したときからすでに5～6年が経ち、高鳳蓮さんの作品にはかなり大きな変化が生まれていました。作品の大きさは、以前のような手のひらサイズの小品が少なくなり、紙幅が広くなり、雄大さと勢いに溢れ、形ももっと個性的になりました。作品の内容も簡単な動物や草花、人物、十二支などから人類の祖先や昔の聖人、帝王、そして、彼女が住む村の人々の変わらぬ暮らし、喜び、幸福への祈りなどのモチーフへと変わり、これら全てを自分の作品の中に込めようと思いました。高鳳蓮さんの作品を見ると目が眩み、興奮が抑えられなくなってくるほどでした。

日本の友人たちも高鳳蓮さんの作品の斬新さと奇怪、不思議さにとても興奮をしたようでした。さらに、剪纸を型紙にして自分で染めた色布を切り、貼り絵にした「布堆画」も友人たちの関心をおおいにそそりました。作品はすぐに売り切れたので、高鳳蓮さんの顔が嬉しさを綻び、その様子を見ていた私もとても嬉しくなりました。その日、ほんの短い時間に得たお金は日々の労働から得る収入の何倍になるでしょう？ 日本の友人たちを延川に案内して、まず白家塬村に行くということは私が第一に考えていたことで

す。延川には実際には剪纸や布堆画の作品を作って売る人が何人もいますが、その中でも私には真っ先に高鳳蓮さんが頭に浮かんだのでした。

黄土の地に住んでいる人間は先祖代々この地に生まれ、黙々と祖先から受け継いだ土地を耕し、変わらぬ暮らしを続け、死んでゆきます。そして、自らの心を癒す精神的な象徴をもまた先祖代々受け継いでゆきます。その精神的な象徴をもっともよく表す手段が剪纸でした。

＊婚姻・生殖崇拜；人間がどんだんることによって、この地に生きてゆけ、家族が続いてゆけるから。

＊神霊祭拜；神霊を祭るからこそ、家族の平安が守られ、病気も災難もありません。

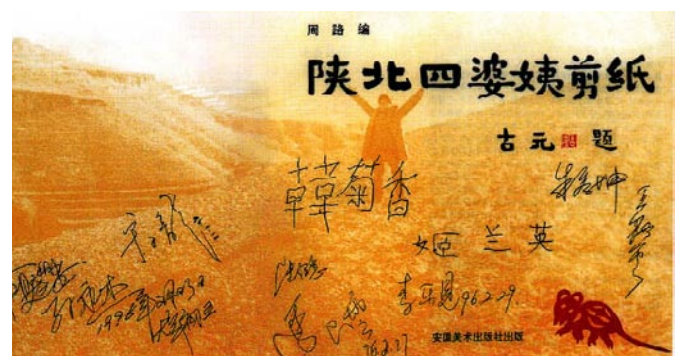
＊龍王・君主崇拜；龍王を祭るからこそ、雨風順調で五穀豊かに実る。また、龍神と土地神を祭れば、どの家も家畜が増え、果物は熟して良い匂いが漂い、四季は春のように穏やかに…。

昔から、黄土高原に住んでいる人間は「人は天に従う」ということを守らなければ、よい時節に美しい景色が現れないかもしれないと思っています。

言うまでもなく、この種の文化は文字で書き表されたものではなく、代々人の口伝えや以心伝心で伝わって行き、人々の血液、細胞に深く染み込んでいるのです。そして人が形で表すときには、その人それぞれの生活体験や文化が反映されて、一致した形というものはありません。そんなわけで、剪纸は無文字で記載する民間伝統文化現象、つまり今の流行の言い方では「非物質文化遺産」として認定されました。

高鳳蓮さんには苦難の人生があり、紆余曲折の体験があったからこそ、心の支えを尋ねるときには、目の前が開け、潜在意識の下から、遙か昔からの、言い伝えられてきた、神々の、言葉としてははっきりと言い表せない姿形が現れ出てくるのです。まさにこのことが高鳳蓮さんを同年齢の人たちよりも一段上手にさせたのです。

同年の7月、日本の友人が再び白家塬にやってきました。今回は日本で「陝北民間剪纸展」を開くために、展示作



高鳳蓮は「ねずみ」の剪纸を剪って自分のサインにした

品を補充するのが目的でした。

その時、友人は前回ここを訪れてからまだ半年も経っていないのに、こんなに沢山の作品があること、そしていくつかの作品の真偽について疑問を呈してきました。いまや私にもはっきりと高鳳蓮さんが金銭の魅力に惹かれたことがわかりました。友人の帰国後、手紙が来て、前回手に入れた作品と今回の作品を見比べていると、いくつかの作品に、図案は高鳳蓮さんのものに似ているが、全体にぎこちなく鈍重で雑な作りのものがあると言ってきました。ちょうどその頃から高鳳蓮さんの娘さんが剪紙の制作をはじめたのです。お母さんよりは娘さんの剪紙に対する原動力はずっと低いものでした。このようなことが原因で日本の友人たちとの次回の交流計画は行き詰ってしまいました。

私は日本で展覧会を開こうとしている人たちを良く知っていました。殆どが家庭の主婦ですが、中国文化に深い関心をもち、勉強会を開いたり、交流をしたりして自身の興味を深めている人たちです。その友人たちが開催した今回の展覧会は、陝北の旅で出会った剪紙という陝北の民間芸術の素晴らしさに深く感銘し、広く紹介したいと純粋な気持ちで開催されたもので、350点あまりが展示され、すべての費用はそれぞれが出し合い、成し遂げたのです。しかし、開催された展覧会の趣旨は高鳳蓮さんにどう説明をしても理解をしてもらうことは出来ませんでした。「お金を儲けるのでなければ何のためにここまでやってくるのですか？」

何回も北京で作品を発表し、高鳳蓮さんと娘さんの剪紙の値段が急に高騰しました。ある日、娘さんはかなり得意げに「母の作品が北京展覧会で大賞を獲得して、800元の値段で売れました。もうこれからはこういう値段でなければ売らなもりはないです。」と、私に言ったのです。これを聞いて私は本当に恥ずかしい思いがしました。それからもう高鳳蓮さんに会っても剪紙の話をする勇気がなく



日本で開催の陝北婆姨の剪紙展(高鳳蓮の作品の前で)
1998年5月 於：町田市国際版画美術館市民展示室

なり、白家塬に行っても風景の撮影をしたり、四方山話をするだけになってきました。

確かに高鳳蓮さんの作品を見ると、太古の時代へ、神霊の世界へ、天の彼方へ導かれるような不思議な魅力があります。それは日々の暮らしの重苦しさに喘ぎ、より良い暮らしへの渴望が生み出す幻覚のようなものです。この感覚を全ての人が表現できるものではありません。だから、私はずっと高鳳蓮さんの豊富な想像力と創造力を尊敬して止まないのです。

高鳳蓮さんと付き合い、話して見ると、人として喜怒哀楽を感じ、普通の情と欲をもった、真面目でごく当たり前の陝北のお婆さんたちの一人だということが分かります。ただ、一般の人よりは性格が気丈で、剛毅で、どこまでも負けを認めないという強さが特別と言えるかもしれません。この強さは、彼女の生活のあらゆる場面で見られます。これが私がずっと高鳳蓮さんと付き合いを続けている理由です。



黄河风情图 (90 x 180cm) 90年代後期

高鳳蓮

女娲が作り上げた人間の子孫たち(媛媛讲故事② ‘わんりい’132号参照)は、長い間幸せな日々を送っていました。

しかし、ある年、予想だにできなかった大変なことが起こってしまいました。水の神の共工と火の神の祝融が喧嘩を始め、それがもとで戦争が起こったのです。

戦争は、火の神の祝融が勝ち、水の神の共工は負けてしまいました。共工は負けたことを深く恥じるとともに憤怒に燃え、自分の頭を力まかせに西方の不周山に打ちつけました。

不周山は天を支える大きな柱だったので、力の強い共工が頭を打ちつけると、山は崩れ、天の半分も崩れてしまいました。

天には大きな穴が出来、大地には至るところに亀裂が走り、火災や洪水があちこちで発生しました。人間たちの家は壊れ、作物は全部駄目になりました。

女娲はこのような恐ろしい世界を見て、心が痛みました。そして、人間の子孫たちをなんとかこの災難から、救い出そうと決意しました。

女娲は急いで黄河の辺に来ると沢山の五色の石を拾って、火の中で溶かし、溶かした液体で天の穴を繕い始めました。女娲は休むことなく九日間も繕い続け、やっと天の穴が完全に塞がれ、太陽や虹色の雲が現れるようになりました。

それでも女娲はまだ安心できず、彼女は東海から一万歳にもなった亀を捕まえてくると、その四つの足を斬りおとして大地の四隅に立てて、天地の四方

をしっかりと支えました。

天は元通りになりましたが、大地はまだ洪水で出来た溝が縦横に残っていました。女娲は芦を焼いて

灰にすると、その灰で大地の溝を埋めました。そうして人間たちはやっと災いから脱出し、再び平安で幸せな生活に戻ることが出来ました。

今、皆さんが見る虹色の雲は、女娲が五色の石を焼いて繕ったなごりなのだそうです。しかしこの災害は、やはりその後の天にも地にも影響を及ぼしました。天は西北へ、大地は東南へ傾いてしまったのです。ですから、太陽や星は何時も西へ進み、どの川も東南へ流れていくのです。



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’会報は、‘わんりい’の会員と関係者の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。

‘わんりい’の頭には日中の冠を載せていますが、中国に限らず各地(主としてアジア)で体験された楽しい話、見聞した面白い話、美味しくて珍しい食べ物の話など、気楽にお寄せいただいているいろいろな角度から諸国の文化に触れてみたいと思います。

紙面が16ページと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせていただきます。

尚、原稿の締め切りは20日ということにしていますが、編集の都合上、早めに頂ければ有難いです。

私は主峰を映す湖を探して海子溝や長坪溝などを歩き回っていますが、色々な廻り合せが悪くて最も後に入ったのが海子溝のガルワン海子(湖)です。ガルワン海子は標高4700m位に有る幾つかの湖の総称で、大姑娘山登山の基地である老牛園子の東側に見えるなだらかな山稜のガルワン山北側のモレーン上にあります。

この山の標高は5100m位でさほど高くないのですが、北側に過って氷床が発達していた広い平地があります。湖一带は標高が高くて足場が悪い急斜面の岩石帯に囲まれ峠道も無いため、ヤクも土地の人も来ずハイキングにも適さない場所です。それ故に私は未知の高山植物との出会いを期待してガルワン海子に入ったのですが、残念ながら期待外れで高山植物の種類も数も少ない所でした。

しかし薬草採りが入ってない場所なので、久々に大きな雪蓮(トウヒレン)を見ることが出来ました(写真1)。

またガルワン海子は四姑娘山南側の峰々(大～四姑娘山)だけでなく長坪溝のゴロミク(下海螺山)5609m、ゴロミティ(上海螺山)5582m、プニュー(神山)5413mも綺麗に映す眺めの良い湖でした(写真2)。

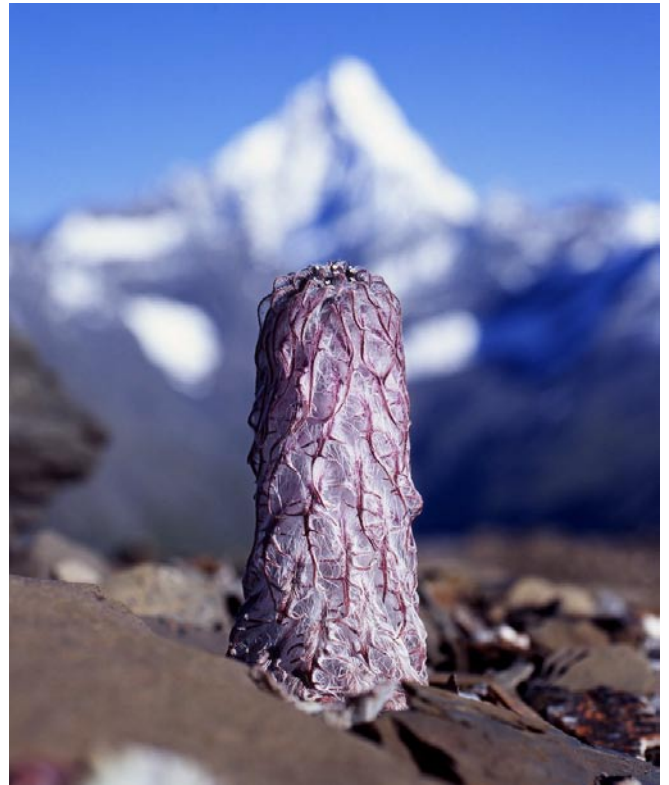


写真1 ガルワン海子(湖)で見つけた雪蓮(トウヒレン<キク科>)。かなたの四姑娘主峰と対峙して象徴的でした。



写真2 鏡面のようなガルワン海子の夜明け。そして対称面を映す四姑娘の山々。

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essay-title.html>

●大川さんのホームページはこちら
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvally.htm>

翌朝目が覚めると、天気は昨日とはうって変って快晴だった。緑の湿原が朝日を浴びて輝いている。抜けるような青空を背景に、輝く雪山が頂上までくっきりとその姿を現していた。

「うわああ～～！！」

思わず子供の様に外に走り出ると、少しでも山が大きく近くに見えるところに行こうと、盆地状になっている湿原を横切り、湿原を縁取る山の斜面を駆け上がった。

昨日の少年達の小屋はこの斜面に建てられており、そばを走り抜けると小屋の中から少年が顔を出し、何か叫びながら手を振っている。

昨日はあれから私達のテントにも少年達が訪ねてきて、牛番小屋では不在だった旅仲間の男性陣や烏里氏も含め、しばらく話をしてすっかり仲良くなっていた。彼らと知り合ったことで、雨に降り込められた垂丁の第一日目もどうやら楽しく過ごすことが出来たのだ。

「おっはようう～～！！」

叫び返しながらも雪山の景色に夢中になっていた私は、足を止めずに山に向かって斜面を駆け上がり続けた。富士山の頂上の標高に匹敵するこの土地では、下界の人間である私が走り回ればかなり息がきれたが、数日前までは歩くだけでも頭痛がしていたのだ。美しいこの土地の空気に自分も順応しているのだと確認したくて、私はことさらに駆け回った。小さな灌木の茂みをハードルの様に飛び越え、草の露を跳ね飛ばしながら駆け上がってくる私の足音に驚いた野うさぎが、目の前を飛び跳ねて逃げていった。

あ～、苦し～！！

斜面の開けた場所に足を止めるとコメカミが締め付けるように痛み、心臓が早鐘のように打っている。しばらくは苦しくて息もつかないほどだ。このまま酸欠で倒れてしまうかと思った呼吸をどうにか整え、青空をバックに聳えている雪山を眺めた。

昨日は山の中腹くらいまでしか見ることができなかったが、この日の朝は頂上の先まで、岩肌の筋や氷河の裂け目の一つ一つがくっきりと見えるほど鮮明だった。山の窪みにハート型にたまっている氷河の厚みはそうとうな物だ。私は持ってきていた双眼鏡で薄いブルーに輝いている氷河を眺めながら、あそこに溜まっている氷河の雪は、何年前に積もったものなのだろうと考えていた。

雪山の絶景を楽しみ、朝の散歩を満喫してテントのあるキャンプ地の方へ戻ると、写真‘命’の男性陣が湿原の牧草地の中にカメラの三脚を立て、秒単位で変わって行

く空の状況に合わせてシャッターを切っているところだった。

昨日は一瞬の奇跡を期待して、忍耐強く雨の中を待ち続けるも不発に終わり、苦渋の涙を呑んでいたプロカメラマンはだしのKさんも、この朝の雪山には苦勞が報われたのではないだろうか。旅行の案内人と銘打って同行してはいたが、実は自分の撮影旅行をちゃっかり仕事にしてしまっていた感もある烏里氏も、夢中でシャッターを切っている様子だ。その横では先程小屋から手を振っていた少年も、いつの間にか小屋から降りてきて男性陣の仲間入りをし、一緒にカメラのファインダーを覗き込んでいたりしている。

私がカメラマンの群れに近づいていくと烏里氏が言った。

「朝食後にハイキングに行くから準備しといて下さいね」

そして少年を指差すと

「彼も行くよ。Kさんのポーターに雇われたからね」と付け加えた。

朝食後、ハイキングの準備を整え私はウキウキしていた。烏里氏の言うことには、この先にもっと美しい景色の見られる場所があるのだという。それに加えてすっかり気に入っていたやんちゃな13歳の少年が、私達のハイキングに同行する事になったのも嬉しかった。私達はそれぞれ小さなザックを背負っていただけだが、少年はKさんのカメラ機材やフィルムなどがぎっしり詰まった、大きくて重そうなザックを背負っている。

更に出発間際になって、この旅行の参加メンバーの中では最年長のTさんもポーターがいたほうが良いということになり、やはり洛絨牛場に遊びに来ていた少年と同じ村に住むチベット族の少女も急遽雇われ、ハイキングに参加することになった。

Tさんのポーターはチベット服に身を包んだ、切れ長の大きな目をした美少女だ。自分の同胞である美しい少女が仲間に加わって、少年も嬉しそうだった。

一行は湿原の端に沿うように伸びている道を、雪山の方向に向かって進んで行った。道は昨日の雨で酷くぬかるんでいて歩きにくかったが、次々と現れる美しい湿原の風景や、咲き乱れる可憐な高山植物に目を奪われて飽きることがない。

しばらく行ったところで林が途切れ、ポツカリと芝生の広場になった様な場所に出た。

うわあ～～！！きれ～い！！

あたり一面、敷き詰められたような可憐な野草の花園だ。それぞれ思い思いの場所に腰掛け休憩した。私の少し先では咲き乱れる花園の真ん中にチベット族の少女が腰掛け、それに寄り添うように少年が半身を横たえ寝そべっている。顔を見合わせ何か話している花園の中のチベット少年と少女。少女の手には無造作に摘まれた花が数本揺れていた。

う、美しい～!! 二人はまるで映画の中のワンシーンから抜け出してきた様だった。私は少年達のそばにいて話に加わりたいたいと思ながらも、あまりに美しいその光景に近寄ることもできず、離れた場所からうっとり見つめてしまった。彼らにとってはこれが日常の風景なのか。なんてロマンチックな～! 思わず嫉妬を感じてしまう。

カメラが欲しい～! 私は旅行などの際ほとんどカメラは持っていかない。どんなに綺麗な風景も私の写した写真では実際と違っていてガッカリする事が多かったし、旅の荷物はできるだけ減らしたい。カメラを持ち歩くのが面倒だったこともあり、美しい風景は自分の目で見ておけばそれでいいやと思っていたのだが、花園の二人があまりに素敵だったので、この旅行中の、この時だけはカメラが欲しいと思えてしまったのだ。

せめて誰か写真撮ってよ～! 私がやきもきしていると、遅まきながら二人の様子に気づいた母が近寄っていき正面からカメラを向けた時には、少女ははにかんでそっぽを向いてしまい、少年はカメラを意識してポーズをつくり、後日出来上がってきた写真は、やはりあの時の素敵な風景とはちょっと違ってしまっていた。

私達が休憩した秘密の花園からほどなくして、湿原の端を縫うように続いていた道は突然途切れてしまった。目の前には洛絨牛場ルオロンユウチャンと同じような湿原がひろがっている。この湿原の向こう端は、この朝私が眺めていた雪山「亜丁三大神山」の一つである「央邁勇ヤンマイヨン」の山裾だ。洛絨牛場から遠くに見えていた神山の岩肌をつたい流れ落ちてくる三筋の滝は、もう目の前にあった。

素晴らしい風景だ。しばし呆然と見とれた。

道が途切れてしまったので、ハイキングはここで終点なのかと思っていると、烏里氏は湿原の中に降りて行く。よく見れば細々と板や木の枝などが渡してあり、その上を綱渡りのように伝って歩くようになっていたが、それは橋というにはあまりにも心もとない代物だ。もしバランスをくずして転んでしまえば、泥まみれになる覚悟をしなければならない。

慎重に歩くが私の靴はズブズブの泥に足をとられてドロドロだ。苦勞しながら歩く私の脇をスイスイと歩いていく烏里氏はとみれば、くるぶしのところまで泥水につかって平気そうにしている。「烏里さんの靴は水が染みないの～?」と私が問うと「私の靴は防水のトレッキン

グシューズだから、全然大丈夫だよ」との答えだ。

冒険やアウトドアは大好きだが、ほとんど経験も知識もない私は、長靴以外にそんな便利な靴があったのか～! とちょっと衝撃を受け、自分も今度そんな靴を購入しようとする時ひそかに心に決めたのだった。

何とか全員が無事に湿原を渡り終わると対岸にある雑木林の山裾に着き、よく見ればそこが登山口となっている。

この時点で結構疲れていた一行は、まだ半分以上の行程があり、ここから先は登山なのだという烏里氏の言葉に、少なからずゲッソリしていた。なんとか高度順応していたとはいえ、やはり酸素の薄い高山では下界よりも体力の消耗が激しいのだ。

「俺は無理だ。ここで昼寝しながら待ってるから気にしないで行ってきてくれ。」

最年長のTさんが言った。

私達はTさんとTさんのポータである少女を残して山に登り始めた。昨夜の雨でぬかるんだ登山道は登りにくく余計に足が重く感じられる。私は自分が完全に高度順応しているというポーズを作りたかったので、元気なふりをして登っていたが、やはり実はそうとう苦しかった。私よりもかなり年上の旅行メンバー達は尚更だった事だろう。日本人組の歩みの遅さに合わせているのが面倒になったのか、少年は一人で先に行ってしまったらしく、いつの間にか姿を消していた。

「ねえ～、こんな登山なんかして何があるのお～?」

ついに弱音を吐きそうになった私が声をあげた。

「なんでも頂上にすぐ綺麗な湖があるんですって」

え!? すごく綺麗な湖～!? それは見たい!!

山の頂上にある綺麗な湖とはどんななんだろう。人一倍好奇心が旺盛な私は、登山の目的が出来た事で俄然元気が湧いてきた。やはり苦しい事をするには、それなりの目標があるのと無いのじゃ大違いなのである。

それまで歩いてきた雑木林がいつしか途切れ、先ほどは下から見上げていた滝がいつの間にか目の高さまで迫ってきていた。見上げればこの朝、洛絨牛場から双眼鏡で眺めていた氷河も、グンとその距離を縮めて頭上に迫りスゴイ迫力だ。

ヤッホー!!

気分の盛り上がりしてきた私は、亜丁の山々に向かって多少場違いな叫び声をあげた。

(次号に続く)

※最初から読みたい方はワンリィホームページ「わん会員たちのエッセイ」に収録してあります。

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/motoko/motoko-title.html>

です

2006年9月、「わんりい」誌上にスリランカ紹介文の掲載を始めて以来、スリランカ人気質を中心として書いてきました。

これまでは悪人については積極的に書いた事ありませんが、もちろんスリランカにも世界中のどこの国とも同じ様に、殺人事件や窃盗事件が頻繁に起きています。でも、最近の日本の様に親が子供を、子供が親を、単に人を殺したかったという理由にならない理由で死傷させるといった悲惨な事件はありませんね。スリランカでは、よその国に比べると悪人よりも良い人の比率が高いような感じが僕はしています。内戦が続いているので、その指導者がスリランカ最大の悪人ではないかと思いますが、ここで取り上げるのは止めましょう。

今回は、観光客をカモにしている街中の小悪人を紹介しようと思います。昨年1月号の「コロomboで一日時間があまったら」で紹介した寄付金集めのおじさんです。

観光客の多いゴールロード界隈を歩いていると、おじさんは怪しげな日本語で話し掛けてきます。英文の身分証明書を見せてくれますが、何を証明しているのかわかりません。日本語が書いてあるノートや、名刺の束を見せて日本人と仲の良い事を強調して一生懸命話かけてきます。ノートには観光客が書いた住所氏名やスリランカの感想が書いてあったりしますが、現地駐在員達によって「この人を信じてはいけません」等の警告が書いてあるページもあります。名刺は相当古い物が多く、擦り切れていたり、黄ばんでいたりします。こんなノートや名刺を見せたら、かえって怪しまれるのではないかと思うのですが、おじさんはノートに書いてある内容は判らないのでしょうか、大真面目に1ページ1ページ、1枚1枚見せて、貰った時の話をしてくれます。

大概の場合、おじさんは自分の出身校の校舎改築費用を集めていると言って与太話を切り出します。最初は1000ルピー(約1000円)寄付して欲しいと言いながら、相手の反応を見て寄付金を上下させてきます。観光客の方は会話を始めると相当にしつこく付き纏われるので、寄付金の話が出てきたら無視して逃げた方が無難です。ここから先は、暇をもてあまして駐在員(僕の事です)の話になります。

おじさんも、相手の雰囲気や服装を見れば観光客か駐在員かの区別がつくと思うのですが、それが出来ないよ

うです。

折角話し掛けられたのですから、暇つぶしにおじさんの話を聞いてみることにしました。おじさんによれば、自分は退職した公務員で出身校の校長に頼まれてボランティアで寄付金を集めているそうです。学校名を聞いて、僕が〇〇通りにある学校かと聞き返した時点で僕が観光客ではないと気がつきそうな物ですが、まだ気がつきません。校舎が古くなって雨漏りするとか、床が抜けたとかももっともらしい説明をします。

スリランカの場合、公立校の校舎等の維持管理は政府が行うので修理の為の寄付金集めは、このような形ではありません。私立校の場合は、もともとのお金持ちの子弟しか通わないので有力OBが個人的に寄付をして改築や修理をしてしまうので、やはり街頭で寄付金集めなんて普通はしません。まして、おじさんの言った出身校は有力政治家や財界人などの著名人を輩出している有名校なので有りえない話です。もう少しまともな嘘を言えば良いのにも思いましたが、からかわれている事に気が付かない様なので、さらに話を進めてみました。

僕が、とても良い話だから是非とも寄付をしたいと申し出ると、僕の顔色を見ながら恐る恐るという感じで最初の1,000ルピーから10,000ルピーに金額を上げてきました。その金額でも良いと伝えると、良いカモが引かかったと思ったのでしょう喜色満面になりました。

次に、寄付金を何時何処で渡すかという話になりました。僕が、大金を寄付するのだから学校を見てみたい、校長先生にも挨拶をして直接寄付金を渡したいと言うと大慌てです。同じ様な事が他の赴任国でもありましたが、途中でからかわれている事に気が付かれて、開き直られて凄まじく、仲間が集まってきたりで、こちらも冷や汗をかきましたがスリランカでは大違いです。

まだ気が付かずに、今日は休校で中に入れなとか、校長は不在だとか言い繕い始めました。それでは寄付する事は出来ないと伝えたと、気の毒なほど落胆してしまい、暇つぶしにからかったのが申し訳ないほどでした。それでもおじさんは、最後まで気が付かなかったようです。

その日はそのまま彼とは別れました。その後もゴールロードを車で通る際に、観光客に声をかけている彼の姿を見る事が出来ました。きっと生活が成り立つぐらには寄付金を集める事が出来るのでしよう。驚いたのは、

数カ月たった頃に再び彼から声を掛けられた事です。最初の口上は全く同じで暫らく聞いてから、前にも会った事があるのを告げると照れ臭さそうに笑っていました。

道端の茶店に彼を誘って話をしてみました。寄付金の話は全くの嘘でしたが、退職した公務員というのは本当に日本語の他にも数ヶ国語を話せ、各国毎に用意してあるノート等の小道具を見せてくれました。寄付金集めの詐欺なんてしないで他の良い事をすればと忠告しても、ニコニコしているだけです。本当におじさんは小心者だけれども気の良い小悪人ですね。

南町田にスリランカ料理の店が出来ましたので紹介します。店名は「ディヤダハラ南町田店」と云います。一昨年と昨年と夢広場でスリランカ料理を出していた店です。夢広場では、限られた料理しか出せませんでした。店では多くの種類のスリランカ料理を楽しむ事ができます。場所はスーパーマーケットのカルフル1Fのフードコートにあります。小さな店ですが、南町田に行く機会がありましたら立ち寄ってみて下さい。

「わんりい」のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 「わんりい」

毎年、4月が「わんりい」おたより会費更新の月です。おたより会費は主として、おたよりの制作費及び送料として充てられますので、まだ、2008年度未納の皆様、継続会費(1500円/年)の納入をよろしくお願い致します。新規入会も歓迎します。

「わんりい」という会名は、「万里」の中国読みから付けられました。文化は国境を越え万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して理解を深め合い、国や民族を超えた友好を育てたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報「わんりい」を発行し、情報の交換に努めています。

新入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は「わんりい」HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

中国を読む(51)

「中国行きのスロウ・ボート」 村上春樹 著

(中公文庫)



北京五輪の聖火リレーのニュースを見ていて感じるのは、奇妙な嘯み合わなさだ。聖火リレーを妨害するのは「フリーベット」と訴える人々。祖国の聖火に燦る問題に憤る中国人たち。職務に従順な警察官や警備員。その十重二十重のなかを、微妙な表情で走る地元

の人。一体感で迎えられるはずのスポーツの祭典が、こんなに嘯み合わないままで進められる違和感…。

リビングのテレビに直面して、ちょっと遠いところで、聖火リレーのことを考えていたら、この小説を思い出した。ページにして50枚の短編。村上春樹の小説に出てくる変に魅力的な「僕」たちのなかの一人である、この小説の「僕」は、3人の中国人と接点を持つ。点と点は接するだけで線にも面にもなることがなく関係性が消えていく。そこに漂う空気が、不思議な嘯み

合わなさだったので思い出したのかもしれない。

「僕」が出会った中国人は、一人は大切なエピソードをくれた教師で、一人は恋に落ちたかもしれない女子大生で、一人は名前も思い出せないクラスメイトで。けれど結局、彼らと少しずつずれて「僕」は「彼ら」と違うどこかにいる。だけど、ここだって「僕」の場所でもないのだ。

恋に落ちたかもしれない中国人の女子大生とは、楽しいデートだったのに齟齬が生まれる。齟齬は雪だるまのようにどんどん膨らんでいき、結局、接点は線になることなく消えていく。彼女の「そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ」という言葉だけが残されて、「僕」は彼女と繋がることはできなかった。けれど、それは彼女とだけでなく、ある日、この東京という街だって、自分と嘯み合わず崩れていくかもしれない。

「無数にある人々の営み。プライドと自己憐憫の限らない振幅。これが街だ。」と「僕」は山手線の車内で思う。結局、嘯み合わないモノたちの集合体が街なんだとすれば、聖火リレーの嘯み合わなさも、ちょっとだけ理解できる。

(真中智子)

▶ 春節の旅

北京での滞後は、山西省の省都・太原と平遥を訪ねることにし、2月16日北京西駅から出発した。

太原での切符は3日前に北京駅で買うことが出来たが、春節ということもあって手に入れるのは難しいかと思っていたところ、すんなり窓口で購入できた。これは意外であった。その上、出発当日も北京西駅の中はそんなに混んでなく、ぎりぎりの時間で着いたために、出発時間間際に乗り込むような状況だったが、ホームまでスムーズに行くことが出来た。出発時間は午前11時12分。あたふたと列車に乗り込むと、指定された座席の周辺はどこも埋まっていた、ひとつだけ空いていた。そこが私の席であった。太原までは7時間半ほどかかるようで、到着時間は夕方6時50分とのことであった。

座席は3人向かい合わせで、前には小学生3人、隣には子供の付き添いらしい女性と子供が乗っていた。様子を見てみると、子供たち(小学2～3年の男子3人と女子1人)は太原から北京に行き、何かのコンテストに参加し、その帰りのようである。

話を聞いてみると、北京で英語の発表コンテストに出たようで、それぞれ表彰状を大事そうに出しては見、しまつては見、何度も見ていた。「何のコンテストなの?」と尋ねると、一人の子が得意そうに「英語コンテストだよ」と答えて、表彰状を見せてくれた。4人とも簡単な英語を話すことが出来、中国語を交えながら車中ずっと話をしていた。

私が日本人だとわかると、子供たちは何度も「バックヤロウ!」と言いながら、私に向けて銃で撃つしぐさをし、倒れるまねをする。最初何のことか分からなかったが、しばらくしてそれがテレビのドラマなどに出てくる日本兵を真似ていると分かった。夜テレビを見てみると、よく日中戦争中のことをテーマとしたドラマがあるが、その中で日本兵は「日本鬼子」と呼ばれて、恐れられている存在として出てくる。しかし、この言葉は同時に日本人に対する蔑視を表す言葉としても使われている。子供たちは意味も分からずに、ごく自然にこんな言葉を覚えてしまったのだろう。私には多少ショックではあったが。

子供たちはかなりこづかいを親からもらったらしく、車内で物品販売のワゴンが通ると、果物やジュース、トランプ、果ては親へのお土産としてネックレスなどを次から次へと買っていた。そんなにお金を使っても大丈夫だろうかとこちらの方が心配になるほど、たくさん買っ

ている。財布の中には数百元のお札が見えた。家庭にはほとんど子供は一人しかいないので、甘やかされていて、こんなところにも中国の一人子政策の影響がでているのだろうか。

時間通りに太原に到着して、子供たちとは握手をして別れた。私の方は予約しておいた山西大酒店へ向かった。山西省といえば、刀削麺や剪刀麺のような独特の麺料理が知られているが、チェックイン後すぐホテルのレストランへ行き、これらの料理を賞味したことはいうまでもない。刀削麺は肉入りタレと味噌タレなどをトッピングして食べるやり方を頼み、剪刀麺は酢と醤油で味付けした炒め麺で頼んだ。どちらも初めて食べたが、思ったほど癖がなく、やわらかくて食べやすかった。やみつきになりそうな麺料理である。

太原には1泊だけなので、翌日は朝食後すぐ市内にでかけた。12時に車を頼み、それまでの4時間ほどをぶらぶら散策してみた。北京から来てみると、やはり落ち着いた静かな街という印象を受けた。

まずホテルからタクシーで10分くらいのところにある「崇善寺」へ行き、その後「純陽宮」、「文廟」、「山西省博物館」を中心に回り、後は歩いてホテルへ戻った。太原は夏非常に暑く、冬非常に寒いという華北地方の典型的な気候で、1年を通して乾燥している。私が訪れたこの時期は北京よりもかなり寒く感じられた。限られた時間であったが、太原の街となりを知ることが出来たと思う。

ホテルに戻り、12時に頼んであった車で平遥へ向かった。太原から平遥までは約90kmあり、2時間で着くことが出来た。この街は1997年ユネスコの世界文化遺産に登録されている。

平遥は明時代に作られた城壁に囲まれていて、14世紀にその基礎が出来上がったが、明清時代に米穀と塩の売買で財をなした山西商人の登場にともない発展を遂げていく。街に入った途端、明清時代にタイムスリップしたような感じで、どの家も建物も昔のままに保存されている。しかも中に入ってみても、昔をしのぼせるようなそのままの生活で、近代的な装いはほとんど見られない。所々にエアコンが設置されていたり、パソコンが置いてあるなど、わずかに見られるだけである。

平遥に着いてすぐ予約しておいたゲストハウスに向かった。このゲストハウスは「協順隆賓館」という名前前で、街のメインストリートである明清街にあり、レストランとゲストハウスを兼ねている。宿泊代は1泊250元

(朝食付き)で、2泊する予定なので500元を支払った。すぐ部屋に案内してくれた。部屋はオンドルがついた伝統的な様式で、ベッドではなく布団を敷いて寝るというものである。もちろんシャワー・トイレ付き。このゲストハウスは清代の伝統的な四合院建築様式で、なかなか落ち着いて、雰囲気が良い。このような古建築を改築したホテルが平遙には何軒もある。

街を散歩してみた。観光パンフレットに出ているような、本当に昔のままの街並が存在し、数百年前に戻ったような雰囲気、その古さと手付かずのままの姿が大変気に入った。街の中心部は外部の車は乗り入れ禁止で、人力車と観光客向けの電動カートだけが走ることが出来る。歩行者は安心して街中を歩ける仕組みである。

明清街の中央にある市楼に登ると、街全体を見渡すことが出来、本当にこの街が城壁に囲まれていることが分かる。市楼の下を走る明清街の両側の家々はすべて昔のまま、ところどころに洋風の建物が散見出来る。しかし、それとて清末の古いものであろう。夜の街の光景は昼間とは異なり、家々の軒先に吊り下げられたちょうちんの明かりとライトアップされた建物や塔が幻想的で何とも言えない。昼間もかなり寒かったが、夜は一段と寒くなり、6時過ぎてから雪が降ってきた。夕食をとり、早々に切り上げて宿に戻った。

翌朝外に出てみるとかなり雪が降ったようで、どこも雪一色である。寒いこともあり、街に出るのはどうしようかと思っただけ、しかし、雪で覆われた街を見るのもいいのではないかと考え直し、出かけることにした。まず、博物館や記念館等を見学するために共通チケット(120元)を購入した。このチケットで街中のすべての博物館や記念館、城楼を見ることが出来る。昨日登った市楼にもう一度行ってみた。

上にあがると、雪一色に覆われた街が見え、昨日とは全く違って見えた。その後、中国票号博物館、古衛署、平遙県博物館(元々は清虚館という道教寺院)、五道廟、城隍廟、平遙城壁、双林寺等を見て回った。これらを見るだけでほぼ1日かかってしまった。まだ見ていないところもあったが、もうこれで終わりにした。次回を期したいと思う。

最終日は、太原に戻らなければならなかったが、もう1箇所訪ねたいところがあった。それは『紅夢』(中国語原題『大紅灯笼高高掛』)という映画の舞台となった「喬家大院」で、ぜひこの大邸宅を見たいと思っていた。

この映画を見たのはもう10年位前になるだろうか。張芸謀監督、鞏俐(コン・リー)主演のこの映画の舞台となった喬家大院は、平遙から太原に向かって約35kmのところであり、ちょうど太原に戻るのには好都合であっ

た。ここは喬一家のかつての大邸宅で、中国北方民家建築の典型である。

高さ10mを越える壁に囲まれた約8720m²の敷地内に300を越す部屋があり、清末から中華民国にかけて国内外に名をはせた金融資本家・喬一族の生活を知ることが出来る。この邸宅は現在民族博物館として公開されており、内部は6つの展示部分に分かれていて、建物と良い展示されている宝石や家具調度品と良い、どれもすばらしいものばかりである。

私が一番興味を覚えたのは、建物である。特に細部にわたって施された彫刻がどれをとっても精巧ですばらしい。建物や通路を歩いていると、映画で見た場面が次々と浮かんで来て、あの場面はここだったのかとか、冒頭のちょうちんがたくさんぶら下げられているシーンはあそこだったのかと、映画と実際の場所とが重なりあって思い出された。

2時間位見学して、自動車のあるところに戻ってくると、運転手が何やら困ったような様子で、彼の友人らしき人と共にしきりにドアを何かで開けようとしている。私の姿を認めると、「申し訳ないが、キーを車内に置きっぱなしにしてしまい、ドアを開けることが出来ない。息子に電話をしてすぐ予備のキーを持って来るように頼んだので、心配ない。すこし待ってください」と言うではないか。

とんだハプニングで驚いたのは言うまでもない。この後すぐ太原武宿空港まで直接行くことになっていたのに、困ってしまった。その時、時間はちょうど10時で、予約してある飛行機は午後1時10分発の寧波行きである。空港まで1時間位はかかるので、遅くとも11時40分までには出ないといけない。

「キーが届くまで、その辺をぶらぶらしててください」と言うので仕方がないが、土産売り場や酢の販売所(この辺は良産の酢の産地である)をのぞいたりして、時間をつぶした。何度か車のところへ戻ってみたが、まだ彼の息子は姿を見せず、やっと12時10分位前に到着し、車を開け、出発することが出来た。

それから猛スピードで空港に向かい、どうにか12時45分には着くことができた。飛行機には無事乗ることが出来、寧波に向かった。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

2008年5月28日から30日の3日間、横浜で開かれる第四回アフリカ開発会議。日本政府が、諸国連機関と協力してアフリカの開発問題を政府の政策レベルで、アフリカの閣僚をアフリカから招いて話しあい、協力しているというものだ。この会議は、1993年を最初に5年に一度開かれてきており、今回は横浜の開港150周年、市政120年の記念にあたることから、その記念の一環としてアフリカ開発会議の横浜での開催への運びとなっているようだ。

会議のタイトルに、「toward a vibrant Africa(元気なアフリカを目指して—希望と機会の大陸)」とある。日本政府がアフリカを援助の対象としてだけみるのではなく、希望と機会の対象ととらえている。投資・貿易の対象としてのアフリカに注目している。アフリカには希少鉱物資源をはじめ、石油・石炭などまだ開発されていない地域も数多くあり、ヨーロッパ、アメリカ、中国が利権争いに奮闘している。

特に中国は、戦略的に外交を展開しながら、次々とアフリカの資源の利権を手に入れて自国の発展のための資源確保を図っている。また、アフリカの大統領や大臣の中国訪問も数多く行われ、中国の国家主席、政府要人のアフリカ訪問も同じく盛んに行われている。

しかし。

諸外国のアフリカへの援助の歴史は今や50年以上を越えているが、いまだすべてのアフリカ人が人間の最低

限の生活を送れるようになるどころか、貧富の差は国内でも激しくなっていており、その差はますます広がってきている。開発会議、開発政策、援助、いろいろな試みがアフリカでは国、政治レベルで日々行われている。そのためにヒトモノも動く。

しかし。

いまそこにいる一人のアフリカ人の生活が、それによって少しでも変わる確率はどのくらいあるのだろうかを、私は思ってしまう。もちろん、長期的には変わっていく可能性もあるのだろうとは思っている。

さてアフリカに暮らすどのくらいの人が、この会議に期待して、明日からの生活がどのように変わっていくのかを思い描いているのか？

ケニアにいた頃、「日本の援助はいろんなことをしているでしょ」とケニア人の友人に聞いたことがある。政府の役人はもちろん賛同してくれたが、ほとんどの人にはその効果が目に見えることはなく、日々の生活に変化を感じることは少ないのではと思った。

投資・貿易の効果が長期的には人々の生活に変化をもたらす日もあるだろう。

ただ、今日の前にあるこの状況を、貧困を変えていくには、私は「経済の発展」「国の発展」の中にあって、「個々人の経済的な発展」がなければ、アフリカは元気になてなれないと思っている。

よじょうざんしん
松本杏花さんの俳句「余情残心」より

山吹の一重が似合う雨催

tiānsè yīnchénchén
天色阴沉沉

dānbàn dìtáng huā qīngxīn
单瓣棣棠花清新

jǐngxiàng yóu xiāngchèn
景象尤相称

季语：棣棠花，春。该花为蔷薇科落叶灌木，高约2米。晚春开金黄色五瓣花，花径约4厘米，长于山地。

赏析：此句表象为写景小品，描述天象阴沉，即将下雨时棣棠花亮丽夺目的景色，实际是借用典故抒发了怀古情愫：棣棠花的别名在日语中与“无蓑衣”发音相同，江户时代《太田道灌借蓑图》一诗就是利用二者谐音，讲少女无蓑衣可借，便送对方一枝棣棠花。此句再次引用，既显示出作者渊博的古典文学知识，又无刀斧之工，妙哉！

よじょうざんしん
潔く崩るる牡丹平和かな

shèngjié shù mǔdān
圣洁数牡丹

luò yīng yījiù chén bù rǎn
落英依旧尘不染

tàipíng shèng shìjiān
太平盛世间

季语：牡丹，夏。

赏析：清纯的牡丹花一尘不染，即使凋谢也圣洁无瑕，这是多么祥和的盛世啊！倘若惨遭战乱或灾荒的涂炭，岂能有此光景。

我国唐代诗人徐凝咏牡丹诗云：“何人不爱牡丹花，占断城中好物华。疑是洛川神女，千娇万态破朝霞。”虽然此首俳句写的是花谢，但与徐凝诗的共同之处均是赞颂太平盛世的。由此可见古往今来，中外东西，热爱和平的人永远是大多数。

上海美術館コレクション 1979-2007 (入場無料)

於：(財)日中友好会館・大ホール

東京都文京区後楽1-5-3



周 鉄海 (ジョウティエハイ) 1996 ~
「innocence」(2005) シルクスクリーン
88.5×64cm



張曉剛 (ジャン シャオガン) 1958 ~
「同志 No.14」(1999) 油彩 130×120cm



劉小東 (リュウシャオドン) 1963 ~
「支える」(1999) 油絵 200×200cm



方力鈞 (ファンリイジュン) 1963 ~
「1996 ~ 2003.11.3」(1996 ~ 2003) 油
絵 230×180cm

'08年5月10日(土)~6月8日(日)
10:00 ~ 17:00 (月曜休館)
金曜日のみ19:00まで開館

●ギャラリートーク:

5月10日(土)15:00~(約40分)

*上海美術館館員による作品解説

主催：(財)日中友好会館、上海美術館

COLLECTION OF
SHANGHAI
ART
MUSEUM
1979-2007

急激な社会的変動と経済成長を遂げている近年の中国は、芸術のテーマや表現方法、新しい芸術を指向する画家の精神に影響を与えています。上海美術館は、中国最大の商業都市・上海の繁栄街に位置しており、幅広いジャンルの作品を所蔵、展覧するとともに、自国の伝統と国際的感覚を持ち合わせる現代中国アートの発信地としての役割を担っています。今回の展覧会では、その上海美術館の所蔵品の中から選ばれた現代アート67点を展示することです。中国現代アートを通して、中国の新しい息吹を知る機会になると思います。

日本中墨会・第四回水墨画展

2008年5月20日(火)~25日(日) <http://www.kanakengallery.com/>

神奈川県民ホール・ギャラリー・第3、4展示室
横浜市中区山下町3-1

- ・桜木町駅②で市バスに乗車「神奈川自治会館」下車2分
- ・みなとみらい線「日本大通り駅」約6分
- ・JR根岸線及び市営地下鉄「関内」駅 徒歩15分

TEL/FAX: 042-757-9518 (満 柏)

北京オリンピックイヤー記念日中国際交流イベント

エンレイコンサート with 新谷葉子

歌姫「テレサテン」役で脚光を浴びたエンレイのコンサート

2008年6月1日(日)14:00開演

於：町田市民フォーラム・ホール(188名)

参加費1,500円(全席指定)(6歳以上)

申込み：042-728-4600

(財)町田市文化・国際交流財団

茶館銀芽11周年記念「茶仙との出会い」

5月25日(日)11:00~16:00

於：菜香新館5F

*横浜市中区山下町192 ☎045-664-3155

¥8,000(ランチ&二胡と古箏のコンサート&品茶)

定員：60名

【当日のプログラム】

11:00 ~ 受付

11:30 ~ 12:30 ブランチ/菜香新館の特別メニュー

12:45 ~ 13:45 コンサート(二胡&古箏)

14:00 ~ 15:30 品茶(中国茶6種を自由にどうぞ)

16:00 記念撮影、解散、関帝廟へお参り

ランチメニュー

季節の前菜3種/紅海産エビの特製マヨネーズ風味/干貝柱入りフカヒレスープ/活はまぐりのニンニク香り蒸し/菜香双種籠(菜香特製蒸し点心2種)/カニ肉入り炒飯/湯葉豆腐のデザート

申込み：電話・FAX: 03-5748-3040(ラサ企画)



インドネシア・ジャパン国際文化交流写真 入場無料

現地インドネシア人たちの撮影によるインドネシアこの10年・外務省日本インドネシア友好50周年認定事業
2008年4月29日(火)～5月11日(日) 10:00～17:00(月曜休館)

於：(財)日本カメラ財団 JCIIIフォトサロン

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地JCIIIビル
東京メトロ半蔵門線半蔵門下車⑤番出口徒歩2分

主催：Indonesia Japan Photo Exhibition

問合せ：090-9006-9899 森隆伸

*【麻生サークル祭】(下記サークル祭案内を参照)では、この写真展に展示された写真が、代表の森隆伸さんの解説で上映されます。

国際文化交流を目的に、主要な5つの島と中規模な群島17,000以上の島々から成り立つインドネシア全土から集められた生活の息づく写真約100点を展示。多様性の中に生まれた文化、民族、風土など、この10年のインドネシアに焦点を当て、現地の人々が撮影した写真を通して「生の」インドネシアを紹介。

Hakuju Hallシリーズ 中国の楽器・その音の広がり7

笛子と笙/伝統と現代

出演：王明君(笛子・簫)・銭騰浩(笙)・何晶(琵琶)・
及川夕美(ピアノ) 友情出演：姜小青(古筝)

2008年6月22日(日)

於：HAKUJU HALL

14:00開演(13:30開場)

小田急線「代々木八幡」、東京メトロ千代田線「代々木公園」駅より徒歩5分

料金：全席指定

¥5,000(前売り) ¥5,500(当日)

主催：ラサ企画

TEL/FAX：03-5748-3040 ラサ企画



huí niángjia

回娘家

fèng chuī zhè yángliǔ me shuā lā lā lā lā lā
凤吹这杨柳么唰啦啦啦啦啦

xiǎo hé lǐ shuǐliú zhè huā lā lā lā lā lā
小河里水流这哗啦啦啦啦啦

shuíjiā de xīfù tā zǒu ya zǒu de máng ya
谁家的媳妇她走呀走的忙呀

yuánlái tā yào huí niángjia
原来她要回娘家

1 shēn chuān dàhóng āo tóu dài yī zhī huā
身穿大红袄 头戴一支花

yānzhi hé xiāngfěn tā de liǎn shàng cā
胭脂和香粉她的脸上擦

zuǒshǒu yī zhī jī yòushǒu yī zhī yā
左手一只鸡 右手一只鸭

shēnshàng hái bēi zhe yīgè pàng wáwa ya
身上还背着一个胖娃娃呀

yī ya yī de ér wéi
依呀依得儿喂

2 yīpiàn wūyún lái yīzhènfēng ér guā
一片乌云来 一阵风儿刮

yǎnkàn zhe/zhuó shān zhōng jiù yào bǎ yǔ xià
眼看着山中就要把雨下

duǒ yòu méi chù duǒ cáng yòu méi chù cáng
躲又没处躲 藏又没处藏

dòu dà de yǔdiǎn wǎng wǒ shēnshàng dǎ ya
豆大的雨点往我身上打呀

yī ya yī de ér wéi
依呀依得儿喂

3 lín shī le dàhóng āo
淋湿了大红袄

chuī luò le yī zhī huā
吹落了一支花

yānzhi hé xiāngfěn biànchéng hóng níbā
胭脂和香粉变成红泥巴

fēi le yī zhī jī pǎo le yī zhī yā
飞了一只鸡 跑了一只鸭

xià huài le bèihòu xiǎo wáwa ya
吓坏了背后小娃娃呀

yī ya yī de ér wéi
依呀依得儿喂

ā i y a wǒ zěnme qù jiàn wǒ de mā
哎呀！我怎么去见我的妈

麻生市民館利用団体による楽しい催しがいっぱい!

恒例! あさおサークル祭2008

於：麻生市民館全館

小田急線・新百合ヶ丘駅北口徒歩3分麻生区総合庁舎内

2008年5月24日(土)・25日(日)

～'わんりい'の全ての催しは無料です～

●5月24日(土) 視聴覚室 10:30～12:00

スライド上映会「現地インドネシア人たちの撮影によるインドネシアこの10年」(上記掲示板参照)

●5月24日(土) 大会議室 14:30～16:00

TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル演奏会

TOKYO万馬馬頭琴アンサンブルは、日本人のみの馬頭琴アンサンブルとして今年5月、モンゴル国にて開催の「国際馬頭琴フェスティバル in Mongolia2008」に参加。麻生サークル祭での演奏会では、帰国後初めての演奏会として、本場モンゴル国で演奏の実力を披露します。

演奏予定曲：「スーホの白い馬」「藍色の子守唄」
「草原賛歌」など15曲

●5月25日(日) 視聴覚室 13:30～15:00

スライド上映会「写真でたどるチベット旅行」

～青蔵鉄道の旅から～ 解説：河本義宣